

米国の青少年・大学スポーツにおける「hazing」容認の風潮は  
排除されていないことが判明（12月24日）

バンダービルト大学（Vanderbilt University、テネシー州）医学部傘下のバンダービルト・スポーツ医学センター（Vanderbilt Sports Medicine Center）に所属するアレックス・ダイヤモンド氏（Alex B Diamond）らは、青少年及び大学スポーツにおいて、多くの選手が「いじめ・しごき（hazing）」を受けているとの研究結果を「英国スポーツ医学ジャーナル（British Journal of Sports Medicine）」誌で発表した。ダイヤモンド氏らによると、高校在学中に「hazing」を経験した生徒は全体の47%で、特にスポーツ、予備役将校訓練課程（Reserve Officers' Training Corps：ROTC）や、学校の楽団などの活動に参加している生徒でこの割合が高いという。しかし、同研究の中でダイヤモンド氏らによる「hazing」の定義に基づく行動を経験した全体の47%の生徒の中で、それが「hazing」であると認識している生徒は8%に過ぎないことが判明した。また、全米大学競技協会（National Collegiate Athletic Association：NCAA）に所属する競技選手では、全体の80%が大学での競技生活中に何らかの形での「hazing」を経験しており、その中の42%は高校でも「hazing」を経験したことが明らかになった。屈辱的もしくは危険な行為を強要される「hazing」は、精神面・身体面に悪影響を及ぼす可能性がある一方で、回答した大学生の多くからは「集団への所属をより強く意識できるようになった」「達成感や『強くなった』との意識を感じた」などの肯定的なコメントも得られたという。ダイヤモンド氏は、「hazing」撲滅のためには、学生、大学運営者、コミュニティ・リーダー、コーチ、医療関係者、メディアなどが協力し、「hazing」を許容する風潮を変える必要があると主張している。

Reuters, Hazing still common in collegiate and youth sports

<http://www.reuters.com/article/us-health-youth-hazing-idUSKBN0U71DS20151224>